

渡名喜島の遺跡

当真 嗣一 *

はじめに

渡名喜島は原始古代の遺跡が多い。これまでに発見されている遺跡は、沖縄貝塚時代の前期からグスク時代におよんでおり、その数は7カ所となっている。4km²にも満たない絶海の孤島で、しかも山地が多いという自然的制約がありながらこれだけの遺跡の存在が確認されているということに驚かざるを得ない。これらの遺跡は島びとたちの祖先の歩んできた道すじを語る「歴史の証人」であるばかりでなく、科学的な地方史を系統的に理解するための生きた資料となるものである。

ここ渡名喜島では、つい最近までターマタ(二股)の島の股の部分(海上から見る渡名喜島はあたかも二つの島が水路を挟んで隣接しているかのように見えることからそう呼ばれた)は水路となっていたんだとか、あるいは入砂島が渡名喜島の発祥地だなどということがほことしゃかに語り伝えられているのであった。ところが現在では水路であったはずの地域からは古い時期に属する東貝塚が発見され、島の発祥地だとされる入砂島では今のところ新しい遺跡しか発見されてないということが考古学上の事実となっており、これらのい、伝えが単なる伝説にとどまるということが明白となっている。

これまでの調査によれば渡名喜島に人間がはじめて住みつくようになるのは今からおよそ三千数百年前の時代である。この時代は縄文時代の中期末から後期に相当する時代であり、わが南島の貝塚人の間で伊波式土器や萩堂式土器が流行する時期にあたる(貝塚時代前期前半)。前述の東貝塚はこの時期に位置づけられる貝塚であり、ここから出土した伊波式土器は、口縁部から底部にかけて保存が良く伊波式土器の器形を知る上できわめて貴重なものとなっている。

また伊波式土器に共伴して嘉徳I式土器や面縄東洞式土器が多量に出土することは、奄美との交渉を解明していく上で、きわめて重要な遺跡となるであろう。

貝塚時代後期では埋葬人骨が出土したアカル原遺跡があり、さらに時代が降りた西底原遺跡から発掘された共同墓地では、これまでに全く例をみない葬法によって埋葬されているという葬制上の事実がわかり、わが南島における葬制資料に新資料を追加することになったのである。

グスク時代になると里遺跡やスンジャグスクがある。里遺跡は標高80mの小高い丘に営まれた館様の遺跡である。ここでは数基におよぶ掘立柱の建物跡が発掘され、グスクの発生を研究する上で貴重な資料を提供してくれる数少ない遺跡の一つとなっている。なおスンジャグスクは、特殊な石墨遺跡をもつグスクであり、グスクの性格を論ずる上で欠くことの出来ない遺跡であると思われる。

このように渡名喜島で発見される遺跡は、その一つひとつが島びとたちの生きざまを伝えてくれるものであり、かつそれは地域の歴史を理解する上でも欠くことの出来ないものとなっている。

私たちはこの小さな島に珠玉のように散らばる遺跡から、先人の歩んできた道すじを知ることができるものばかりでなく、今後の歴史創造の糧を汲みとることができるるのである。

渡名喜島の位置と環境

渡名喜島は那覇の西方海上約54.5kmに位置し、黒潮の回流する久米島の北方にある。東シナ海に点在する島々の中でも比較的小島で、上空から見る形は三日月形をなし総面積3.77km²、周囲

8 km、人口598人をかぞえる（昭和55年 月現在）。

地形的には島全体が丘陵地帯に取りかこまれている格好をとり、北半分が標高 146m の西森を中心には緩やかな丘陵をつくり、南半分は大岳やオモ岳の山地が起伏し、南東部は絶壁をなして海にせまっている。これらの南北の山地は島のほぼ中央部で砂丘によって接続され、現在の集落がこの砂丘上に占地している。

地質については、専門家によれば、後期古生代の渡名喜層を基盤にして、その上に第三紀の火山岩、これらを被覆する第四紀の海成段丘堆積物、海浜堆積物などからなるようであり、その構造はきわめて複雑で、鉱物も多いようである。

山地の裾野に広がる海岸地形に目を転じてみると、現村落の南西側と北側および南側には比較的広い砂丘が続いており、そこは過去から現在にいたる人間活動の舞台となった場所である。また島をとりまく礁湖は、過去の人びとによって生業の場へとかえられていったが、その名はイフガキ、メーガキ、フタライシュガキ、ユブクイシュガキ、クンシガキとして今日までその片鱗をとどめている。

わが南島は亜熱帯特有の高温多湿で、春先から秋にかけて襲来する台風に昔から苦しめられてきたのであるが、この自然の脅威にうちかつために渡名喜島の住民は、道路より60—70cmも低く住居を掘り下げ、そのまわりにフクギの木を植えて屋敷林をつくっている。このような村落の景観から台風に対する島びとたちの苦難歴史と自然を征服していく人間の英知が深く生きづいていることを読みとることができる。さらにまた、空中写真でも明瞭のように島の耕地面積が少なく、過去の地割遺構が山頂まで整然と残されているのを見るにつけ、どんなに陥しく狭少な土地であっても可能な限り畠地につくりかえていこうとした先人たちの生への執念の凄まじさに驚かされるのである。

渡名喜島の遺跡の概要

渡名喜島における考古学的調査で、これまでに明らかにされた最古の遺跡は東貝塚である。この貝塚は沖縄貝塚時代前期に属し、伊波・萩堂式とともに嘉徳Ⅰ式・面縄東洞式などの奄美系土器を伴出する貝塚である。前期に後続する中期の遺跡については、これまでのところよく知られていない。最近沖縄大学学生文化協会の調査によってユブク遺跡の発見が報告されているが、遺物包含層の有無についてはまだよく確かめられていないという。

後期ではアーカル原遺跡やアンジェーラ遺跡があり、グスク時代になると里遺跡の存在が知られるようになる。後期とグスク時代のミッシングリングを担う遺跡に西底原遺跡の存在が注目される。この時期の遺跡としては入砂島においてもつい最近散布地が確認されている。

このように渡名喜島には沖縄の貝塚時代前期から後期・グスク時代にいたる各種の遺跡が分布し、過去から現在に至るまで継続して人間活動の舞台となったことが知られるのである。

以下、各遺跡について概観しよう。

東貝塚

東貝塚は東部落の北端にあり、標高 5 m の砂丘地に位置する。遺跡は宅地造成により大きく破壊され中心部はすでに完滅したものと考えられる。出土する遺物は沖縄貝塚時代前期の伊波・萩堂式土器を主体に嘉徳Ⅰ式・面縄東洞式土器などの奄美系土器である。

過去2度にわたって小規模の発掘調査が行なわれ、土器片、石器、貝製品のほかに貝殻、魚骨、イノシシの遺存骨などの自然遺物が多量に発掘されている。この結果については『渡名喜島の遺跡Ⅰ』として報告書が刊行されている。

報告書では、奄美系土器の多出する傾向をこの貝塚の特徴としている。

なお、C¹⁴年代測定は日本アイソトープ協会に依頼して実施され、次の測定値を得ている。

N-3080 3620 (±95)B.P年代(1950年よりの年数)

アーカル原 遺跡

この遺跡はアーカル原にあり、標高6mの海上のぞむ砂丘地に位置している。現状は畠地や原野となっている。1978年に村の教育委員会によって試掘調査が行なわれた。遺物は土器や貝製品などの自然遺物が豊富に出土している。遺構には炉址を伴なう柱穴群、土塙などがある。

柱穴群の下層からは埋葬人骨が発見された。この人骨は頭を北西に向け、足を伸ばした状態でうつぶせに葬られていた(伏臥伸展葬)。伏臥伸展葬の例は読谷村渡具知木綿原遺跡(第2号人骨)でも報告されている。この例の場合は、箱式石棺内に葬られたもので両足が大形シャコガイ2個によって覆われ特殊な葬法例として知られている。

アーカル原遺跡では、人骨の出土地点を中心に比較的広い面積で発掘されたにもかかわらずほかには人骨の出土がなかった。したがって共同墓地に葬られたものではなく一体のみ単独に葬られた例として理解される。佐野一氏(琉球大学保健学部教授)の人骨所見では身長147cmの老人女性と推定されるという。

上述の人骨が出土した場所から約30m離れた第Ⅱ区の試掘トレンチでも人骨が出土している。このトレンチは遺跡の南端を明らかにするために発掘されたものであるが、地表下約1.50mの深さで確認された遺物包含層中から貝殻や魚骨などの自然遺物にまぎって2体分の頭蓋が出土した。佐野一氏の所見によれば、第1号頭蓋は右側頭骨のみで壮年男性であり、第2号頭蓋は左頭頂骨の一部と頭蓋底で成人女性ということである。なお第1号頭蓋は左側頭頂結節部より後方後頭骨にかけて火を受けて黒褐色に変色している。

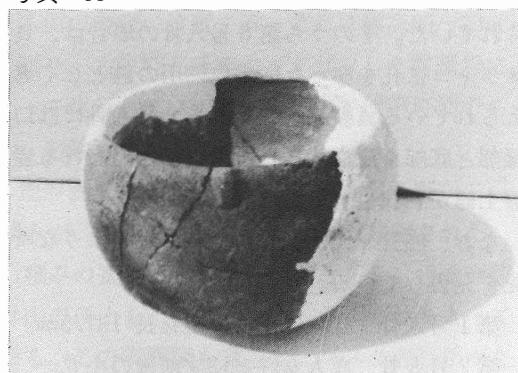
西底原遺跡

グスク時代に属す里遺跡が立地する丘陵の麓にあり、標高7mの平坦地に位置している。遺

跡は西ノ底原1150番地を中心に東西約200m、南北約500mにわたって遺物の散布が認められている。遺跡が広範囲にわたることから北側から南側にかけて順にA地点、B地点、C地点、D地点とそれぞれ分けて呼称される。

村教育委員会によって1977年発掘調査が実施された。その時の調査結果によればA~C地点が居住区域、D地点が当時の墓地区域だと理解される。

A地点は僅か10m²程の試掘で終ったが完形の写真—A



土器が出土した(第3図-1)。この土器は口縁部が外反するくびれ平底のカメ形土器で口径20cm、器高18cmを測る。

B地点では地表下約40~50cmの深さから長径9m、短径約5mの略楕円形状の貝層が保存の良い状態で発見されている。この貝層はマガキガイとアマガイを主体とする貝塚で、掘り出された貝殻は総重量にして約2トンにのぼった。写真—Aの鉢形土器はこのB地点から出土した土器で口唇直下に縦位のコブが付いている。口径推定22cm、器高18.5cmを測り、底部に煤の付着が認められることから鍋として利用されたものと思われる。グスク時代に編年される土器である。

C地点は渡名喜小学校の北に接し、ここでは地表下120cmのレベルで完形土器が出土した。第3図-2がその土器で口唇下約1.5cmのところに2つの孔をもち、朝顔形の器形をなすカメ形土器である。2つの孔は亀裂したところの左右に相対して穿孔されていることから補修孔とい

う考え方も成り立つ。土器は固く焼きしまり、胎土に赤色物質を混入するフェンサ下層式の土器である。

D地点では渡名喜小学校の校門付近から南側にかけて広がり、1977年の調査ではここから8体の人骨が検出されている。人骨は白砂中に直葬されたもので、そのうち4体はバラバラに飛散し、残る4体はほぼ完全な状態で出土した。これらの人骨はおむね向きが東に統一され、下肢は足先を揃えて膝を立て、その膝を両側に倒した形の状態であり、非常に特殊な葬法で葬られていた。そのうち第6号人骨の場合は、ヒメジヤコに孔を穿った従来魚網用の錘として考えられている貝製品を、また第2号人骨には口縁部と底部を意識的に打ち欠いたと思われる壺形土器が副葬されていた。

なお、佐野一氏は人骨について次のような所見を発表している。

第1号人骨 壮年男子 推定身長 137.5cm。

第2号人骨 成人女性と13才前後的小児。

第3号人骨 熟年女性 推定身長 142cm。

第4号人骨 壮年男性 推定身長 154.5cm。

第5号人骨 熟年女性と壮年男性 推定身長
いずれも 156cm。

第6号人骨 熟年男性 推定身長 168cm。

アンジェーラ遺跡

アンジェーラ遺跡は島の南東側に細長くのびる砂丘地に位置している。ここは標高6mの微高地となっている。遺跡名のアンジェーラという名はアンジェーラ浜にその由来がある。貝塚のある地域は厚い砂丘の堆積がみられ、貝層の中心部がどこにあるのか明確にされていない。1977年の村教育委員会による試掘調査では土器片と貝製品が出土した。土器は薄手無文のカメ形土器で占められる。沖縄貝塚時代の後期に属す土器である。

入砂島の遺跡

入砂島は渡名喜島の北西約4kmに浮かび総面積

2,335.12アールの島で無人島である。現在は沖縄駐留軍実弾射爆場として使用され、日曜日以外連日実弾投下訓練が行なわれている。戦前のノルマ島は、島周辺で漁をする権利が入札制によって決定されていて、誰でも漁ができるというものではなかったという。今回の調査では、漁の権利を得た人の屋敷跡も東側の海岸で確認できた。ここでは貝殻の堆積層を確認したが、貝層中に壺屋焼の陶片などが混入し、明らかに現代の貝塚であることことが知られる。島びとののはなしによれば、漁の合い間に貝を剥身にして売り出していたとのことである。

この屋敷跡から約30m程西側へ行ったところで、土器片と青磁片、須恵器片を採集することができた。採集された遺物はフェンサ下層期からグスク時代にかけてのものであるが遺跡の中心部および遺物包含層などを確認することはできなかった。砂丘の堆積層が比較的厚いことから、実際の遺物包含層は地表下からかなり深いレベルに埋没しているものと考えられる。

第1図の遺物実測図は、筆者によって採集された遺物である。1と2は口縁部を外反させ口縁端を剣頭状につくる標品で、そのうち1は縦位の凸帯を鞍状に貼付する。3は口縁部をゆるく外反させる土器片である。4は丸底の底部で器厚が薄く均等であることから小形の土器底部であろう。割れ目は疑口縁をつくっている。いずれもフェンサ下層式に属するものである。

6は須恵器片である。器外面に格子の叩き目を明瞭に残す薄手の胴部破片である。器内面は横ナデ調整により叩き目が消されている。色調は器内外面がやや黒味をおびた灰色、芯部が茶褐色を呈している。

5は青磁碗の口縁破片で、細線の蓮弁文を有する標品である。色調は灰色をおびた青、胎土は淡灰白色を呈している。

7は凹石である。この標品は入砂島の管理主が住んでいたという屋敷内からの採集である。表裏の二面と両側面に凹みがあり、いずれも使用時の打痕を明瞭に残している。石質は輝緑安山岩、重

量 2.3kgである。近時まで使用していたとみえ、使用痕が新しい。戦前剝身の道具として使用されたものと推察される。

里 遺 跡

東部落の北側標高80mの小高い丘の上に位置している。ここは標高 140mの西森に連続する山の尾根のところにあたり、現在の村落からはちょうど仰ぎみるような場所に占地した格好となっている。

里からの展望は 180度開け、島をとりまく珊瑚礁や礁湖が村落に迫るのを眼下に望み、遠く東方海上に沖縄本島、西方海上に久米島を眺望することのできる景勝の地となっている。里には村びとたちによって「里殿」、「ヌン殿内」と呼ばれる拝殿があつてそこは村一番の信仰地となっている。

1978年、村教育委員会によって地形測量と発掘調査が実施された。その結果両拝殿を中心と長方形形状のフラット面が階段状に数段にわたつて築成されていることがわかった。そして里殿と称す拝殿北隣のフラット面では基壇と掘立柱建物跡が、またここより一段下がったノロ殿内の拝殿があるフラット面ではL字状の小溝を有する掘立柱の建物跡が発見された。遺構内は黒色土で被覆され、フラット面の縁辺部隅には当時の小貝塚が形成されている。

出土した遺物はフェンサ上層式と呼ばれるグスク系土器、中国産陶磁器、鉄釘、鉄鎌、古銭、炭化麦、牛の遺存骨などである。中国産の磁器類は南宋・元のものも若干含まれているようであるが、主として明代のものであり、14~15世紀頃の遺跡と推定される。

里遺跡は、グスクという呼び方はされていな

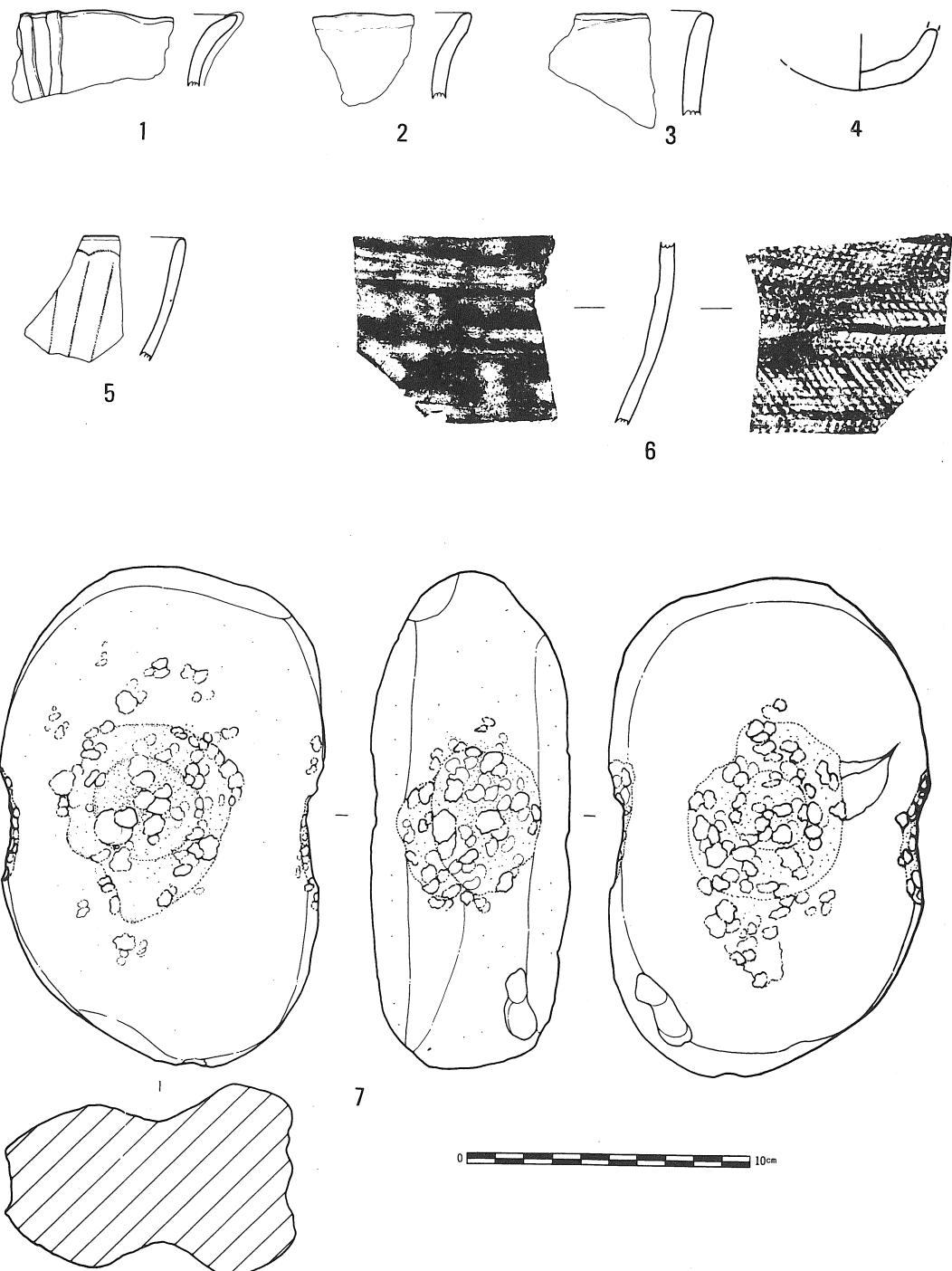
いが、沖縄史でいえば三山分立時代から尚巴志による三山統一前後の時代における島の豪族の居館址だとみることができる。

里の時代は、旧来から続いている狩猟・漁撈による自然物採集の経済段階を完全にぬき出て、農業社会の生産経済段階であり、社会構成的には当然階級社会の歴史的発展段階にあった時代である。

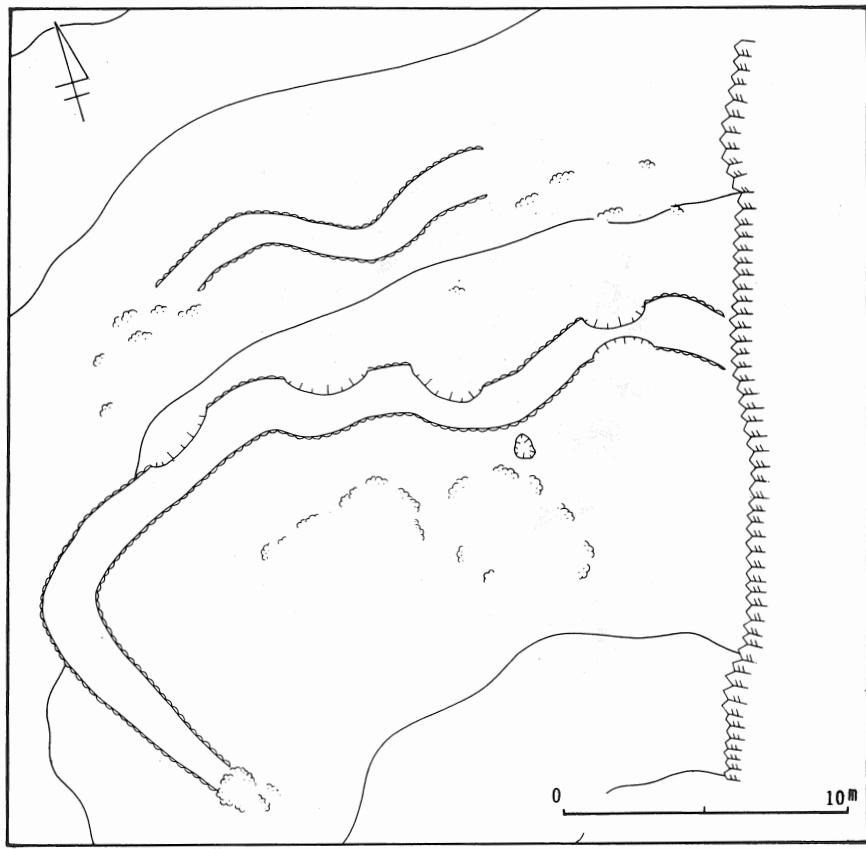
スンジャグスク

アーカル原の南にそびえる古生期石灰岩からなる山の中腹に位置する。ここは標高60~70mを測り、古生期石灰岩のゴツゴツした露頭岩によって覆われていて居住区としては不可能である。勿論水場もない。

地形測量により、等高線に平行して野面の石積みが二重にめぐっていることが確認された。石積みの高さは1~2m前後であり、平面形態は山の頂上をとり囲むように半円形状をとっている。この実測図を見ると、グスクの石垣がただ単に囲いという性質のものでないことが理解される。というのは、石積をめぐらしている部分が緩傾斜面だけであり、とくに傾斜が緩やかな部分には二重の構造がとられているのに、絶壁の縁辺には全く石積みが認められないからである。スンジャグスクの構造をよくみると自然の地物を巧みに利用して陥落なところはそのまま生かしそうでないところは石垣を一重あるいは二重に築き、全体的な繩張りが城的な性格を強くもって決定されていることがよくわかる。したがってこのグスクの築城の目的は、宗教的なものにあったわけでもなく、古代人の葬所としてでもなかった。それは逃城的なものとして理解した方がより妥当と思われる。



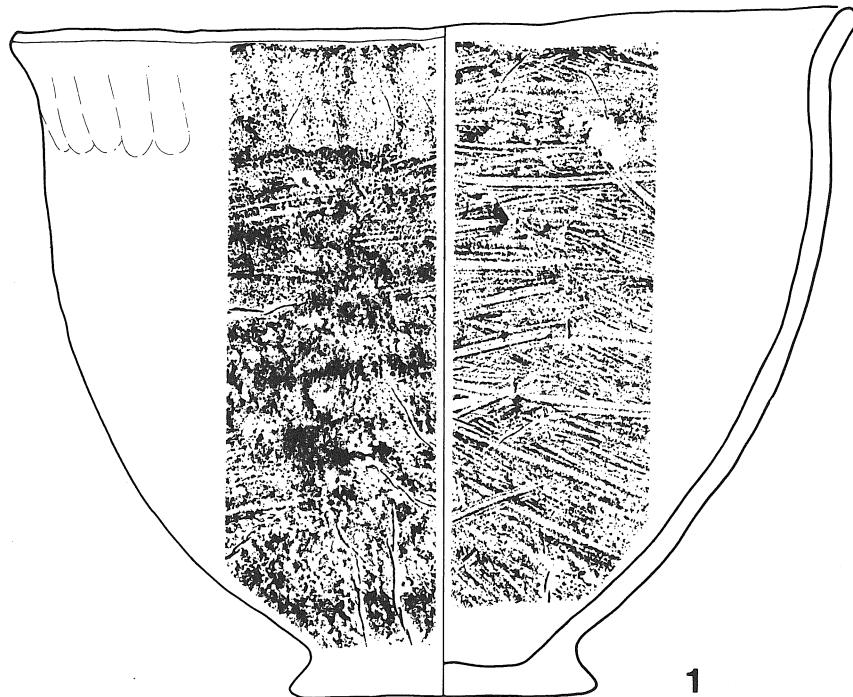
第1図 入砂島採集の遺物



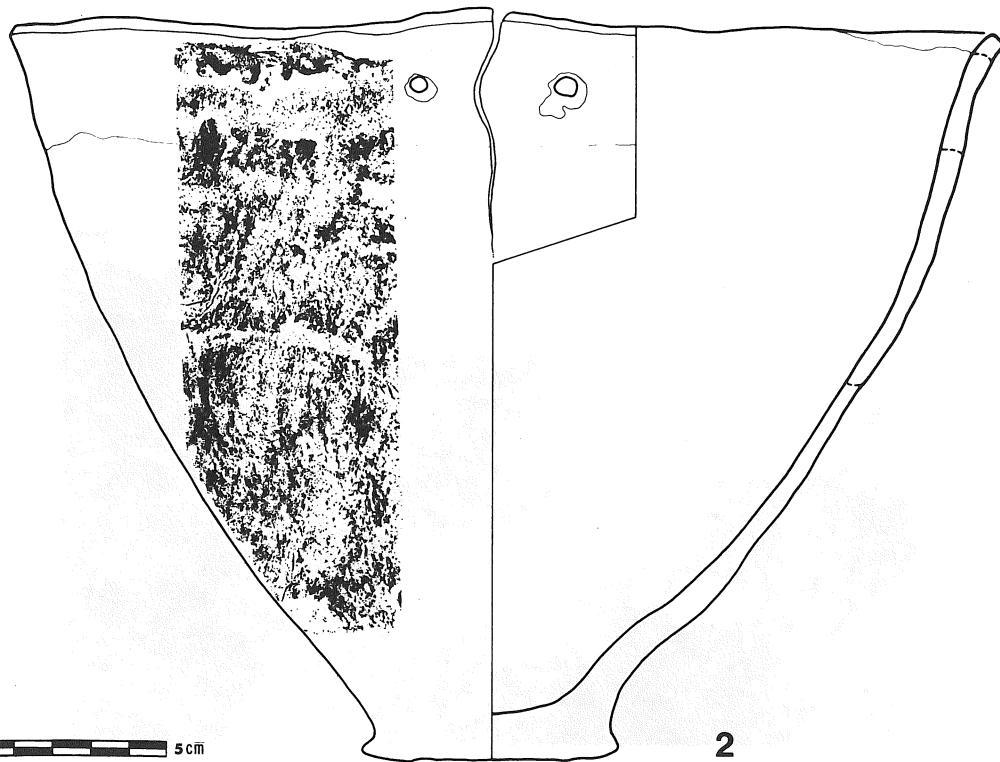
第2図 スンジャグスク



写真B スンジャグスクの石垣



1



2

0 5cm

第3図 土器実測図